ガザでの女性支援事業

**5月にはガザの空爆があり33人が亡くなりました。
またヨルダン川西岸や東エルサレムでは、連日、イスラエル軍や入植者による攻撃でパレスチナ人が負傷し、家屋破壊や土地収奪も進む中、明るく、希望を感じさせてくれる話題をご紹介します。**

ハビールさん

5月の空爆 ©UNOCHA

空爆や侵攻、封鎖、貧困とガザ地区の状況は長年厳しく、人々は大きなストレスを抱えて生活をしています。夫や親などから妻や子どもたちへの家庭内暴力や虐待は以前からありましたが、特にコロナ禍で人々が家に閉じ込められ、職を失って収入が途絶えたため、家庭内暴力と虐待は従来の二倍になったといわれています。

被害を受けている女性たちのため、国連女性機関（UNWOMEN）の資金を得て、22年度ガザの南部で活動する「ウィサールセンター」というNGO施設で支援活動を行いました。

同センターでは、様々な暴力や虐待を受けた女性たちを受け入れ、まずは、個々のケースを聞き取り、必要な専門家を紹介します。離婚などの法律相談、心理士によるカウンセリング、医療機関への紹介をするほか、身を守るすべを教えます。そして、こうした女性たちが少しでも収入を得て生活ができるように、短期雇用による生計支援も行いました。

支援を受けたハビールさん（24歳）

「私は結婚して4年目でした。コロナ禍で夫は職を失い、また外出が禁止されて家にいるようになってから、暴力や暴言が続くようになりました。私は友人や自分の家族と会えなくなっただけでなく、スマホも取り上げられて連絡も取ることが許されず、夫の家族からも嫌がらせを受けるようになって、身体的にも心理的にも追い詰められ、健康状態が悪化していました。夫が用事で外出したすきに、家じゅうを探してスマホを取り戻し、インターネットで偶然に「ウィサールセンター」を見つけました。夫のいない時を見計らって、家を出てウィサールセンターに駆け込み、その場で話を聞いてもらい、アドバイスを受けました。そのまま実家に戻り、その後センターの弁護士に助けてもらって離婚の訴訟を起こして、ついに離婚もできました。そして今では結婚で中退した看護学校に復学しています。身体も心理状態もみちがえるほど健康になりました。ご支援に本当に感謝しています！」と笑顔を見せてくれました。多くの女性が顔と名前を出して話をするのを躊躇する中で、自分の人生を切り拓いた彼女の誇らしげな様子はとても印象的でした。

支援をした女性は全部で約1,500人。20代が33%、30代が40%、40代以上が27%でした。また、そのうちの約1割が深刻な虐待のケースでした。その中には、障がいがあったり、慢性疾患があるなど特に弱い立場の人も多くみられました。支援を受けたほとんどの人が法律相談と心理サポートを受けました。また特に生活が困難な160人を地元の企業やNGOで短期雇用しました。雇用先の60%はNGOでの補助業務、残りは会社や美容院などでの業務でした。

その他に、被害者保護とDV予防を目指したワークショップには、地域の有力者を含む男性200人以上と女性1,300人以上が参加しました。一家の経済的な責任を負う男性もまた、多大なストレスを抱えているので、そうした支援も今後必要になるでしょう。

トルコ地震支援活動

©UNOCHA

2023年2月に発生したトルコ・シリア大地震では、トルコ国内だけでも5万人以上が犠牲となり数百万人が被災しました。被災地のトルコ南東部は元々開発が遅れた地域で、地震からの復興も遅れています。南東部のハタイ県、カフラマンマラシュ県、アディヤマン県などでは建物の多くが崩壊し、多くの人々がいまもテント村や「コンテナシティー」で生活をしていて、その生活環境、衛生環境は猛暑の夏を前に劣悪な状況が続いています。

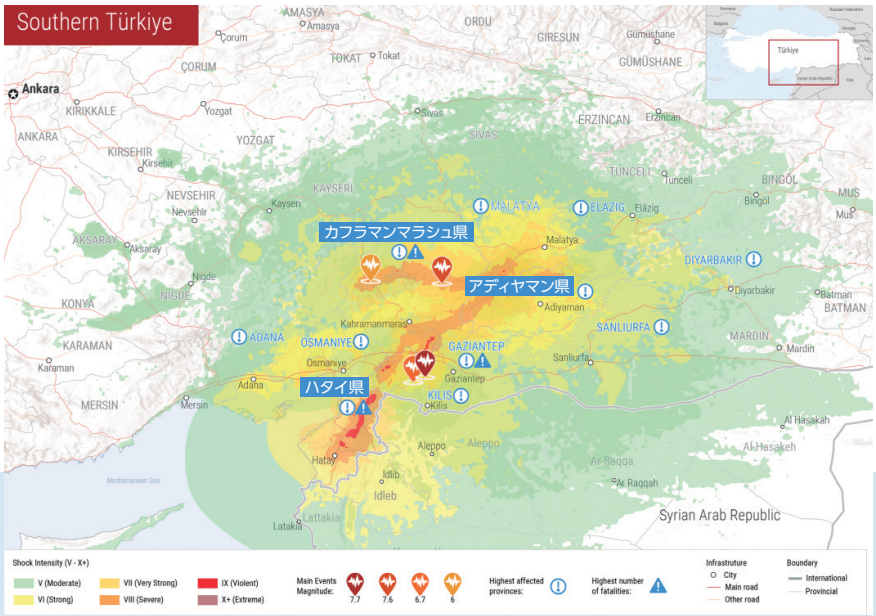
国際的な支援活動があるとはいうものの、脆弱な高齢者や障がい者は特に取り残されていて、自由に使えるトイレなどもほとんどない状況です。その衛生状態を改善するため、車椅子のまま、あるいは介助者と一緒に入れるバリアフリーのトイレとシャワーが一緒になったコンテナユニット42台を、被害が大きく復興も遅れている上記の三県で被災者の住むテント村やコンテナシティーに設置する事業を開始しました。

トルコ社会はまだ若年層が多いものの、今後は高齢化することが予想されていて、被災した地域でも人口の8%以上が高齢者です。また人口の10%程度に障がいがあると推定されています。ですから、行政による高齢者や障がい者に対する福祉サービスの向上や、コミュニティ内での理解を促進することも事業目的のひとつです。

トルコの高齢者支援のNGOである「65+老人の権利のための協会」と連携して、6月から取り残されている人たちへの支援を開始し、現在トイレ・シャワーのユニットをトルコ国内で製造してもらっています。被災から4か月たった現在も多くの人がテントで暮らし、ようやく仮設住宅であるコンテナ住居への移動が始まったばかりです。多くの人にとってはシャワーを浴びることも贅沢とされる状況が続いています。こうした状況ですので、高齢者や障がい者のほか、妊婦や回復期の病人、人工肛門の人など、通常のトイレやシャワーの使用が難しい人たちにも使ってもらう予定です。

被災地域はシリア国境に近く、多くのシリア人難民が暮らしているほか、少数民族のクルド系の住民も多いため、アラビア語やクルド語による使用説明の掲示なども予定しています。

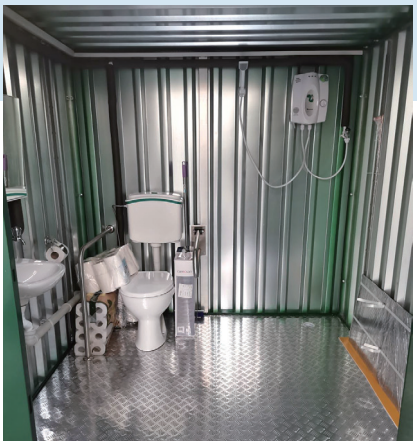
これまで日本の災害支援現場でも、高齢者や障がい者への配慮の欠如がしばしば指摘されてきました。そんななかで、トルコのパートナー団体により提案されたバリアフリーの仮設トイレ・シャワーの設置は新鮮で、これまでの当会の災害地支援の経験からも非常に有意義であり、今後、日本での災害支援につながる経験と学びを得られると思います。



©UNOCHA

震を開始

被災した高齢者や障がい者の支援活動を開始しました。



バリアフリーのトイレシャワーユニットの内部

2023年度の事業の予定

- ガザでの保健医療事業、脆弱世帯への物資配布など
- パレスチナでの教育事業
- レバノンでの教育事業
- レバノンでの保健医療事業、脆弱世帯への物資配布など
- アトファルナろう学校、ナワール児童館、ネゲブでの子ども支援
- トルコ地震被災地での高齢者障がい者などの支援
- 日本国内での啓発活動、刺繍などの販売、外国にルーツのある子ども支援